

スラッフアの リカード著作集編集について

Sraffa and his Edition of Ricardo

松 本 有 一

Sraffa's edition of the Works of David Ricardo is one of the magnificent works in the history of economics. Sraffa performed his editorial works very carefully and in minute detail. The purpose of this paper is to trace his editorial works and the process of the making of the general index. The writer also discusses some episodes related to the works.

Yuichi Matsumoto

JEL : B12, B31

キーワード : スラッフア、リカード、ドップ

Keywords : Piero Sraffa, Works of David Ricardo, Maurice Dobb

- I はじめに
 - II 各巻の序文・解題から
 - III 総索引の作成過程
 - IV むすびにかえて
- 付録

I はじめに

英国の王立経済学会 (Royal Economic Society) は 1925 年、学会の事業としてデイヴィド・リカード (David Ricardo) の著作と書簡集の刊行計画を決定し、翌年、その編集者に T.E. グレゴリー (T.E.Gregory) を指名した。しかし、編集作業はほとんど進まず、1930 年 3 月に編集者をピエロ・スラッフア

(Piero Sraffa) に交代させた。スラッフアへの交代を主導したのは王立経済学会セクレタリーのケインズ (John Maynard Keynes) であった。『エコノミック・ジャーナル Economic Journal』誌の 1930 年 12 月号に、王立経済学会理事会の決定として「a definitive and complete edition of the Works of David Ricardo」が、ピエロ・スラッフアの編集で、おそらくは 7 巻で出版されるとの告知が掲載された。リカードの書簡集や「マルサス評注」などがすでに刊行されており、おおよその全体ボリュームが予想できたのであろう¹⁾。

スラッフアは直ちに作業に取り掛かり、リカードの『経済学および課税の原理』の 3 つの版の対照作業を、ドップ (M. Dobb)、カーン (R. Kahn)、アイズ (Isles)²⁾ とで、1930 年 3 月 17 日から 21 日までの 5 日間で行った。日によってスラッフアを含む 2 人あるいは 3 人で作業をした。作業の完了を、1930 年 3 月 22 日付の手紙でスラッフアはケインズに知らせている。スラッフアの手帳への書き込みから、いつ誰と作業をしたのかが分かる。各日の書き込みは次のとおりである (Sraffa Papers, E3 より。／は改行)。3 月 17 日 (月) 「Posted K's letters to Col. Ricardo + Murray / Read with Dobb+Isles 6 Chp. of Princ.」、3 月 18 日 (火) 「Read id. id 7 Chapt. / Read with Isles only 3½ Ch (ed. 1+3)」、3 月 19 日 (水) 「Read with Dobb only, the same / 3½ Chaps. (ed. 1+2)」、右欄に「1, Dobb」、3 月 20 日 (木) 「Read with Dobb + Kahn / Princ., from p 290 to 426 of / ed 3 (nearly 10 ch.)」、3 月 21 日 (金) 「Read with Dobb + Kahn to / the end (omitting quotation / from Proposals, + Index)」；右欄に「Isles returns」。

リカード著作集に関連したスラッフアからケインズに宛てた手紙がケインズ・ペーパーズ (Keynes Papers) にある。スラッフアはケインズと相談しな

- 1) リカードの死後、マカアロク (J.R.McCulloch) 編集による著作集、ジェイコブ・ホランダール (Jacob Hollander) などによる未刊著作、手稿、書簡集などの刊行の歴史、生前に 3 版まで刊行されたリカードの主著『経済学および課税の原理』のゴナー (E. C. K. Gonner) 版以降の編集刊行の歴史、解釈の歴史、およびスラッフア編集版のリカード著作集の意義については Milgate (2017) 参照。
- 2) スラッフアらと作業をした Isles がどのような人物であるか不明であるが、ケインブリジ大学の経済学トライボス Part I を 1928 年に、Part II を 1929 年に合格した、ゴンヴィル・アンド・キーズ・コレッジ (Gonville and Caius College) の K. S. Isles という学生がいた。

から資料探索の作業を進めていた。ケインズだけでなく、リカード著作集編集に関連してスラッフアが受け取った手紙（およびスラッフアが送った手紙の下書きないし写し）はスラッフア・ペーパーズの D3/11 で多数のファイルに分類されて保管されている。また、手紙の一部は別の分類でトリニティ・コレッジ図書館に保管されている場合がある。1930年7月3日付スラッフアからケインズへの手紙で、3千部をベースに判型の違いなどで費用の見積りを両者でしていることがわかる。1930年7月21日付スラッフアからケインズへの手紙で、大学印刷局に判型、フォント、活字サイズをかえて、『経済学原理』や『マルサス評注』の印刷見本をいくつか作らせていたことがわかる。スラッフアがロンドンのケインズの住居であるゴードン・スクエア46番地に届けた見本刷3種類がケインズ・ペーパーズにある。

1930年4月14日付ミラノからケインズに送ったスラッフアの手紙は、その文面からジェイムズ・ミル（James Mill）からリカード宛の手紙が見つかったことをケインズから知らされたことへの返信と判断できる（ミルの手紙の発見自体はフランク・リカード（Frank Ricardo）からケインズに知らされたようである）。スラッフアは、リカード自身の手紙よりもミルの手紙の方がミルのリカードへの影響の詳細な証拠が得られるので、最も重要なものに違いないと述べている。

スラッフアがリカード著作集の編集を引き受けた時点では、出版まで長い期間はかからないと考えていたと思われる。おそらくは、当時知られていたリカードの出版物や書簡類のほかに、新たに発見されるかもしれない未知の文書、書簡などは、あっても多くはないと考えていたのではないだろうか。実際、1930年6月頃には、1930年中には編集作業を終えられるとスラッフアは考えていた³⁾。

ところで本稿の目的であるが、それはスラッフアが編集した『デイヴィド・リカードの著作と書簡 The Works and Correspondence of David Ricardo』（全11巻、1951-55、73。邦訳は『リカード全集』として出版。本稿では「リ

3) 松本（2010）79頁参照。

カード著作集」と記す)の編集過程について考察することである。編集作業は 1930 年 3 月にはじまったが、本巻の 10 巻が刊行されたのは 1951 年から 55 年にかけてであり、総索引の第 XI 巻は 1973 年に刊行された。編集作業にかかってから第 1 巻の刊行までほぼ 20 年、本巻が完結してから総索引の刊行まで 18 年と、非常に長い年月がかかった。その理由には第二次世界大戦と新資料の発見という外的な事情があるが、スラッファ自身は当初は長い期間を要するとは考えていなかったようで、遅くとも 1930 年代中頃までには全巻の出版を終えると考えていた節があった。

第二次世界大戦がはじまり、イタリアが英仏に宣戦布告した 1940 年 6 月、イタリア国籍のスラッファは英国政府によってマン島の収容所に拘束されたが、同年の秋ごろまでにはケインブリジに戻って来た。この時点で、リカード著作集の印刷用組版作業は進んでいたようであったが、刊行にはいたらなかった。

スラッファは 1927 年 10 月に就任したケインブリジ大学経済学講師を 1931 年 9 月末で辞職した。1935 年 10 月にアシスタント・ディレクター・オブ・リサーチとして大学の職に復帰するが、この間アカデミックな活動としてはもっぱらリカード著作集の編集に携わっていた。もちろんスラッファの心の中にはつねに獄中にあったグラムシ (A. Gramsci) がいたであろうことは忘れてはならない。とはいえ、リカード著作集の編集にかくも長くかかったのは、スラッファの完全主義にもとづく編集作業があったと推察できる。スラッファの編集が如何程であるかは全巻に目を通せばわかることだが、各巻に付された編者序文、解題などを概観することによって、スラッファの編集姿勢を垣間見ることにしたい。特に総索引の作成作業に関しては Gehrke (2005) が詳しく考察しているので、これを取り上げ、加えていくつかのエピソードを紹介したい⁴⁾。

II 各巻の序文・解題から

4) 本稿の一部で筆者自身がスラッファ・ペーパーズ (Sraffa Papers、英国ケインブリジのトリニティ・コレッジ所蔵) を調査した成果を利用している。リカード著作集編集過程をより詳細を知るには、スラッファ・ペーパーズの D3/11 の 240 のファイルのすべてを検証する必要があるが、筆者はまだその作業に至っていない。

この節では、出版された『リカード著作集』各巻の編者序文や解題を第Ⅰ巻から順に見ていくことで、スラッフアの編集姿勢やその作業内容を垣間見ることにはしたい⁵⁾。

第Ⅰ巻総序 (General Preface) — 著作集全体について

スラッフアは1930年3月に編集者に任命されると直ちに『経済学および課税の原理』各版の対照作業をし、またケインズの協力を得て、まだ知られていないリカードの手紙、手稿などの探索をはじめた。「1930年に本版のために未刊行手稿の探索を始めたときに、『下院議員、故 D. リカード殿の文書』という貼紙のついた一つの大きな箱が、リカードの長男オズマーンの旧住所、レッドベリイ付近、ブロウムズベロウ・プレイスで、フランク・リカード氏によって発見された。これは100年近くの間手つかずのままです、……新資料の単一の出所としては最大のものであった」(I, viii, 訳 xviii)⁶⁾。「主要部分とは別に保蔵されていた同様の文書の一束は、それ以前にフランク・リカード氏によって発見されて、J.H. ホランダール教授によって公開された。……それに引き続いて他の手稿がつきとめられた…」(I, viii, 訳 xviii-xix)。

「以上の結果として、リカードの主要な書簡交換者宛の手紙および彼らのリカード宛の手紙のすべてのシリーズが見つかったわけであるが、ただリカードのジェームズ・ミル宛の手紙だけが漏れていた」(I, viii, 訳 xix)。

「1943年7月に、まったく偶然に、鍵のかかった金属製の箱が、C.K. ミル氏によって、ダブリン州、ラヒーニにある、彼の義父 F. E. ケアンズ氏の家で発見された。」「……『デイヴィッド・リカードの氏の手稿』と記された……包は、ジェームズ・ミルの所有していたリカードの多量の新しい著作ばかりでなく、一連のミル宛の全書簡をも含んでいることがわかった」(I, ix, 訳 xix)。

この発見はまさに「まったく偶然」であったが、その発見は1943年7月2

5) 引用文は邦訳書の『リカード全集』を利用しているが、漢数字を算用数字に変えている場合、固有名詞のカタカナ表記を変えている場合や一部訳文を変更したことがある。

6) スラッフア版リカード著作集すなわち Ricardo(1951-55, 1973) からの引用に際しては、巻数、ページ番号、邦訳ページ番号のみを記した。

日付で C.K. ミルから、当時ロンドンからケインブリジに疎開していた LSE (London School of Economics) のハイエク (F.A. Hayek) に知らされた。ハイエクは 7 月 5 日に手紙を受け取り、直ちにスラッフアに知らせた。これを受けたスラッフアは、その日のうちにケインズにこの発見について手紙で知らせ、翌日ケインズを訪ねるためロンドンに行くつもりだと書いた。ケインズは 7 月 6 日付で C.K. ミル (C. K. Mill) とオブライエン (George O'Brien) に手紙を出した (スラッフアの手紙とケインズの手紙のカーボンコピーはケインズ・ペーパーズに保存されていて、松本はそれらを参照した)。

この発見に先立って「1940 年の夏までに、本版中の 6 巻の組版はページ校正までできており、他方『議会の演説および証言』の巻は校正刷の段階に達していた」(I, ix, 訳 xx)。つまり、全 7 巻で刊行予定であったリカード著作集の編集は最終段階に来ていたわけである。

1940 年夏ということでは思い起こされるのは、1940 年 6 月にイタリアが英仏に宣戦布告して、そのため 1940 年の夏の間スラッフアは敵国人としてマン島の収容所に拘束されていたことである。そういうことを考えると、スラッフア一人のことでなく、ドイツ・イタリアとの戦争で 1940 年夏以降、リカード著作集の印刷を進める状況ではなかったのかもしれない。

第 1 巻『経済学および課税の原理』の編集—編者序文より

リカード著作集第 1 巻にはリカードの主著『経済学および課税の原理』(以下、『原理』と略記) が収められている。その初版は 1817 年に出版され、第 2 版は 1819 年、第 3 版は 1821 年に出版された。スラッフアは編者序文で、『原理』が執筆、出版された経緯を詳細にたどっている。スラッフアが明らかにしたところでは、『原理』の執筆にはジェイムズ・ミルが大きく係り、また用意された原稿の章別や排列に助言を与えていた。さらに索引の編集にも係っていた。

『原理』はリカードの死後、これまでさまざまな形で出版されている(詳細は Milgate (2017) 参照)。初版の写真版復刻もあるが、それを除けば生前最終版の第 3 版を底本にしている。スラッフア編集版『原理』の特徴はどこにあ

るだろうか。一番の特徴は、第3版を基本にして、読者が初版、第2版を再現できる、初版、第2版の記述を知ることができるように工夫したことである。もう一つ、スラッフアが明らかにしたことは、初版では第V章と第VIII章が、それぞれ2つある、いわゆる「重章」問題が発生した経緯である。スラッフアの考証では、第V章は校正段階で2つの章に分割され、第VIII章は『原理』初版の本文(1から589のページ番号が付されている)の印刷が終わってから2つの章に分割されたということである。後者の場合は、章の分割によって影響がでるページが印刷し直され、製本の際に元のページを切り取って差し替えられたのである。元のページが切り取られないまま、印刷し直されたページが追加された版本が見つかった(詳細はX, 403ff、邦訳では第I巻 lxxxv以下に収録。その後オランダのヘルルチェ (A. Heertje) 教授が同様の版本を入手したことが第XI巻で紹介されている)。

スラッフアは言及していないが、『原理』初版の各章の第1ページ目の活字組版の仕方は揃っていない。本文ページは1ページ当たり27行で印刷されている。各章の1ページ目は章題が1行で組まれているか、2行にわたっているかで異なるが、章題が1行の場合でも、そのあとの本文が15、16、17、18、19行とばらつきがある。分割された第VIII章の新たな章の第VIII*章は全体で4ページに収めるため、章の1ページ目は本文が21行で組まれている。

『原理』初版は第1章からはじまる本文に1から589のページ番号が付され(厳密には各章の1ページ目にはページ番号は印刷されていないので、ページ番号「1」は印刷されていない)、590ページ目に正誤表が印刷されている。本文より前にはタイトルページ、序文、目次などが置かれ、本文の後ろに索引が置かれている。当時はもちろん活版印刷で、活字を組むのだが、全ページ分の活字を組んで、校正を経て修正してから印刷するのではない。印刷全紙1枚片面の8ページ分を組版し、校正をして、校了すれば所要枚数印刷する。印刷が終われば解版し、活字は溶解される。それが一般的であった。活字による印刷は印字面の摩滅で、千部程度が限界であった。『原理』初版の本文最終ページの次のページに正誤表があるが、本文全部を組版し、校了後に印刷にかかるのであれば、このような正誤表はないはずである。

スラフファ版のリカード著作集は 7 巻分の全ページの活字が組まれたままで置かれていたが、その理由の一つに、編者註などで、参照箇所の指示のため全体のページ番号が必要だったことが考えられる。

『リカード著作集』全 11 巻の各巻初版はすべてケインブリッジにある大学出版社の印刷工場で印刷されたが、再刷以降はロンドンの別の印刷会社でオフセット印刷されている⁷⁾。つまり初版の印刷が終われば活字組版は解版されたことを意味し、紙型はとられていなかったと考えられる。印刷されたものがあれば、必要な訂正をして写真製版によって印刷用原版をつくることができる。紙型による場合では象嵌によって訂正ができる。

第 II 巻『マルサス評注』の編集—編者序文より

1820 年 4 月にマルサス (Thomas Robert Malthus) の『経済学原理』が出版されてすぐ、リカードはそれを通読し、意見を異にする論点について論じることを考え、再読して評注を作成した。1820 年 11 月 24 日付マルサス宛手紙でリカードは「私はあなたの本のなかで異論のある箇所のすべてに評注をつけました。そして自分であなたの著作の新しい版を出版し、問題の箇所に勝手に符号をつけて、そのページの下段に置いた評注を参照するようにしてみようと考えてみました」と述べている。

この「評注」は、マルサスのみならず、マカアロク、トラワ (Hutches Trower) などが読んでいたが、リカードの生前には公刊されず、その後、所在は不明であった。それが 1919 年に偶然発見され、1928 年にジェイコブ・ホランダート T.E. グレゴリーによって公刊された。

『マルサス評注』の手稿発見とグレゴリーとホランダートによる出版の経緯は、

7) 本巻 10 巻の再刷には、印刷に関して「*First printed in Great Britain at the University Press, Cambridge / reprinted by offset-lithography Unwin Brothers Limited, Woking and London*」と記されている。第 1 巻の 1975 年の再刷版には「*First printed in Great Britain at the University Printing House, Cambridge / Reprinted in Great Britain at the Alden Press, Oxford*」と記されている。第 XI 巻 (1973) には「*Printed in Great Britain at the University Printing House, Cambridge / (Brooke Crutchley, University Printer)*」と記されている。

第Ⅱ巻編者序文のⅡに記されている。スラッフアの編集方針は編者序文のⅤで述べられているが、マルサスの本文テキストとリカードの評注は、リカードが示唆したように紙面上段と下段に置き、評注の活字を大きくして組まれた。最下段にさらに小さい活字で二段組で（短い場合は中央に一段で）編者註が置かれ、視覚的にも区別は一覧してわかる。評注の印刷にあたり、スラッフアはホルンダー・グレゴリー版をもとにし、原手稿と照合して訂正した。照合作業はスラッフア一人ではなく印刷工とともに行われた。

スラッフアは編者序文のⅡで、マルサスの死後出版された『経済学原理』第2版のための改訂、修正についての考証を行っている。

第ⅢおよびⅣ巻への編者序文 Prefatory Note to Volume III and IV

第Ⅲ巻と第Ⅳ巻は「Pamphlets and Papers」でリカードが著した小冊子、出版物への寄稿、手稿などが収められているが、「二巻のあいだの区分は年次のなものである。第三巻は、その全体が例の地金論争の時期における貨幣問題にかんする書き物から成るという点で、比較的に大きな統一性をもっている（邦訳書では「前期論文集」）。他方、第四巻は、リカードの晩年に散らばっている雑多な文章から成る（邦訳書では「後期論文集」）。両巻はどちらも二つの部分に分かれる。第一は、公刊を意図した比較的に正式の書き物、第二はリカードの手稿中から取り出した評注と論稿とである。新しい材料が見出されるのは、主として第二の部分である。第四巻のこの部分における書き物は、実際上すべて今日まで未発表だったものである」（III, vii、訳 xv）。

「各巻とも、『対応ページ表』を付録としておいた。」それによってリカードによって公刊された元の版と、スラッフア版を含むその後の諸版との対照が容易になる。

「これら二巻は、……その大部分が大戦前に準備され、したがって故ケインズ卿の助言から利益を受けることができた。故ケインズ卿は編纂関係の資料を草稿のまま読んで、多数の改善を示唆してくれた」（III, vii、訳 xv）。続いて、手稿類の利用に際してそれらの所有者（所有機関）への謝辞、また資料発

見でハイエクの協力への謝辞が述べられている⁸⁾。

「ベントム評注」にかんする解題 (III, 261-266、訳 306-312)

ベントム (Jeremy Bentham) の通貨論をデュモン (Etienne Dumont) がフランス語に訳し、その出版の可否をジェイムズ・ミルに相談した。ミルはデュモンの手稿をリカードに送り、所見をもとめた。リカードはフランス語訳への評論を 1810 年 12 月 25 日から 1811 年 1 月 11 日までの間に書いた。この著作集第 III 巻には、リカードの評論と、その理解に必要なかぎりデュモンの手稿が印刷されている。

リカードの評論が書かれた経緯、時期など、スラッフアは詳細にかつ厳密に調査している。リカードの評論はデュモンの手稿とともにジュネーブの公共・大学図書館 (Bibliothèque Publique et Universitaire de Genève) に保存されている。

第 III 巻付録 『地金報告書』の「——氏」(III, 427-434、訳 519-528)

リカードは「地金報告書に対する評注」などで地金委員会での匿名の証人「——氏」の証言に論評を加えている。この匿名氏について、『証言録 Minutes』では「大陸の商人 a Continental Merchant」となっている。エドウィン・キャンナン (Edwin Cannan) は、彼が出版した『地金報告書』の復刻版 (*The Paper Pound of 1797-1821*, London, 1919) の序文で、この匿名氏を「疑いのない推測」として N. H. ロスチャイルド (Rothschild) であるとした。スラッフアはこれに異論を唱えて、詳細に検証している。それがこの「付録」である。委員会証言当時のさまざまな情報から、スラッフアはまず、匿名氏が「海外居住者であったこと、およびブリテンにおける利害関係よりもヨーロッパ大陸における利害関係をより多くもっていたことが、その当時明らかにされた唯一の情報であった」という。

スラッフアは証言の内容と合致するような大陸の商人を、さらにさまざまな

8) 編者序文中の Librarian を訳書では司書と訳しているが、それは文章途中で大文字で始まる Librarian であり、資料等の使用許可、出版許可を与えてくれた Librarian である。これは図書館長と訳したほうがよい。例えば、ケインブリジ大学の大学図書館の長は Librarian であり、大学の要職である。コレッジの図書館の長も Librarian である。

周辺の証拠から、ハンブルクの商社パリシュ社 (Parish & Co.) に絞り込む。そして、更に証拠を重ねパリシュ社の創設者ジョン・パリシュ (John Parish) の長子のジョン・パリシュ二世にたどりつくのである。最後に、駄目押しに、スラッフアは知己のエドゥアルト・ローゼンバウム (Eduard Rosenbaum) に依頼して、ハンブルク古文書館所蔵の、パリシュの同時代人カール・ジーヴェキング (Karl Sieveking) の未公刊文書にある、地金委員会証言を概観した文書のなかに「ヨーロッパ大陸の一人商人の証言がとくにみごとである。この商人は、現在ボヘミアのゼンフトンベルクの領地の所有者になっている、ハンブルクのジョン・パリシュ氏だといわれている」という記述を得た。ジーヴェキングはパリシュと交渉があり、パリシュは彼に「地金報告書」とそれに関連した『エディンバラ・レビュー』を提供していたことも証拠だてている。

これは、スラッフアが文書・資料を慎重かつ極めて厳密に校閲していることのひとつの証左である。なお、スラッフアは1920年のトリノ大学の卒業論文でキャンナンによる『地金報告書』復刻版を参考文献として利用していた。

第IV巻付録 「独創的な計算家」(IV, 415-418、訳 503-508)

リカードが『経済的でしかも安定的な通貨』(1816年)で言及している「独創的な計算家」が誰であるかについて、ボナ (James Bonar) がそれはトマス・トゥーク (Thomas Tooke) であつたろうと示唆した (*Economic Journal*, 1923, p.414) ことに対して、スラッフアは、トゥークではないことを示したあと、リカードがすでに「独創的な計算家」の正体は「モーガン氏」であることを突き止めていたことを明らかにした。ただし、それはリカード自身が書いたものにあるのではなく、リカードからそれを教えられたグレンフェル (Pascoe Grenfell) からリカードへの手紙から判断されたものである。グレンフェルからリカードへの手紙に「モーガン氏」への言及がある。そして、この「モーガン氏」が「王立学会会員、株式保険会社計理士、数多くの金融上のパンフレットの著者であるウィリアム・モーガン William Morgan (1750-1833) であつたことは疑いない」とスラッフアは結論づけた。

第 V 巻の解題等

第 V 巻には「議会の演説および証言」が収められているが、あわせて、イングランド銀行株主総会その他での発言が掲載された新聞等の記事などが「さまざまな機会における演説」として収められている。議会演説の底本は「議会討論集」である『ハンサード Hansard』を使用しているが、リカードの議会活動に関してスラッフアは「議会演説の解題」(V, xiii-xxxii、訳 xxiii-xlvi)で未公開の資料であるジョン・ルイス・マレット (John Lewis Mallet) の日記を利用しながら詳述している。

議会改革にかんする二つの論説についての解題 (V, 489-494、訳 505-511)

「議会改革にかんする二つの論説 1818 年」(1818 の年号は目次にはあるが、本文の扉ページでは年号の印刷はない) は、リカードの死後、マカアロクによって『スコツマン Scotsman』に掲載された。二つの論説は「議会改革にかんする考察」と「無記名投票案の擁護」であるが、マカアロクは後者を「無記名投票案にかんする演説」と題して、マカアロク編集のリカード『著作集』に再録した。これに対してエドウィン・キャナンは「演説はけっして行われなかった」と演説の有無の確認すらしなかったマカアロクを批判した。スラッフアはこの論説が議会で演説されなかっただけでなく、演説のために書かれたものではないことなど、2 つの論説の執筆時期や経緯を詳細に考察している。

第 VI-IX 巻への序 (VI, xi-xii、訳 xix-xx) より

第 IV 巻から第 IX 巻の 4 巻は書簡集である。スラッフアは「手紙の探索に積極的に寄与し、初期の段階でこれらの諸巻の校正刷りに目を通された故ケインズ卿にたいし、また同様に諸校正刷りをみて貴重な示唆を与えられたジェイコブ・ヴァイナー (Jacob Viner) 教授、F. ハイエク教授にたいし、さらにその編纂にかかる既刊のリカード書簡集に付した序文や脚注の利用を許された故ジェイムズ・ボナ博士および故 J.H. ホランダール教授にたいし謝意を表さねばならない」と述べている。スラッフアは、当時の権威ある学者に対する異論を綿密な校閲によって対置したが、その人たちを含めて多くの人々（その中には論敵もいる）の協力によって、それまで未発見であった資料を収集することができ

た。これにはケインズの幅広い人脈に与っていることも忘れてはならない。

書簡集への編者序文 Introductory Notes to the Correspondence (VI, xiii-xli、訳 vvi-liii)

「… これらの四巻は、リカードが、経済ないし政治上の主題について書簡を交した人々に宛て、また彼らから受けとった手紙から成り立っている。……書簡の交換者としてここにひとたびとり上げられた場合には、すべての現存する手紙が、そのなかのいくつかはたんに個人的なもしくは事務的な性質のものであっても収録された」(VI, xxxviii、訳 1)。

手紙の配列はリカードが書き、受け取った順で、日付順が逸脱するのは、手紙の郵送の遅延や、リカードが不在で手にするのが遅くなった場合などである。

手紙の原文が利用できる場合は、その所在、既刊の場合はその表示が脚注で示されている。手紙が「返事」、「回答」の場合、対応する手紙がわかるよう指示がされている。日付の誤りなどの訂正は編者註が付されている。書簡集各巻の巻末には書簡交換者ごとに索引が付されている。

第 X 巻 伝記及び大陸紀行

「本巻は、リカードの生涯や性格に関係のある資料から成っているのであって、完全な伝記を提供しようとするものではない。」「本巻全体は、前九巻中では示されていない彼の生涯の諸局面や諸時期を描き出すに役立つ切抜き帳のようなものである」(X, ix、訳 xvii) と序言 (Preface) で編集意図が述べられている。

本巻では「人名および地名索引」が他の巻とは独立して付されている。また、既刊諸巻の正誤表が付されている (邦訳書は原書第 X 巻刊行後に出版されているので、各巻で必要な訂正が反映されて訳出されている。原書では増刷の際に訂正されている)。

第 XI 巻 総索引

『リカード著作集』の総索引である第 XI 巻は 1973 年 11 月に刊行された。

本巻の全 10 巻が完結したのは 1955 年なので 18 年が経っていた。第 XI 巻の表題は「総索引 General Index」であるが、簡単な「序言 Prefatory Note」があり、書簡の補遺、注の補遺、第 X 巻に収録された正誤表への追加が収録され、そして「索引 Index」である。この巻の目次を見ると、「Prefatory Note」は目次にはない（他の巻では Preface、Introduction など巻によって表現は異なるが、目次にある）。邦訳書の目次には「序言」はある。Prefatory Note の訳語は邦訳書では統一されていない。

第 XI 巻の序言の全文はつぎのとおりである。「この非常に遅れた索引でリカード『著作集』は完結する。これより以前の索引作成の試みは、A. ヘルチェ教授の手助けで概略作成したものだけであり、最終稿のために役に立つことが示された。そのほかに関しては、バーバラ・ロウ夫人に負っている。何年にも前に始めた仕事を完成させるのを手伝うために彼女はケインブリジに戻って来てくれた。 P. S.」(XI,vii、訳 xiii)。

以上のように綿密な校閲作業を経て、『リカード著作集』全 10 巻が 1951 年から 1955 年にかけて刊行された。そしてさらに 18 年後の 1973 年に第 XI 巻の総索引が刊行され、文字どおり完結したのであった。

III 総索引の作成過程

次に取り上げたいのは総索引についてである。総索引は出版までなぜ長い期間が掛かったのか、索引の作成に関してはスラッフアが「序言」で述べたとおりなのか、ということである。スラッフアは 1954 年に第 X 巻の校正が終わったあと、9 月から 12 月までの約 3 か月の中国旅行に出かけ、1955 年にはいると、のちに『商品による商品の生産』として 1960 年に刊行されることになる自身の著作の準備にはいり、ほとんどそれに集中した。したがって、1960 年まではスラッフア自身がリカードの索引作成作業に携わることはできなかったのだ。では何もなされなかったのか。「序言」で述べられているとおりなのか。

索引の作成過程——ゲールケ論文から

『リカード著作集』の総索引の作成過程に関してはゲールケ (Christian Gehrke)

が詳細に考察している。以下、まずは Gehrke (2005) に依拠して、総索引の作成過程を見ていくことにしよう。

Gehrke (2005) はその表題 “Bringing the Edition of Ricardo’s Works to Completion: The Making of the General Index, 1951-73” のとおり、スラッフア編の『リカード著作集』の総索引の作成過程を追ったものである。かれはスラッフア・ペーパーズ、ケインブリジ大学出版局、モーリス・ドップ・ペーパーズなどに残された諸資料を駆使して、総索引作成過程を跡付けている。

総索引作成作業は、著作集の刊行が始まった 1951 年に始まっていた。最初はケインブリジ大学出版局編集部のブラック (Michael Black) が第 I 巻、第 II 巻の索引カードの作製を本来業務とはべつの空いた時間に行っていたが、1953 年春に放棄した (445-446)⁹⁾。

1953 年の夏にモーリス・ドップが索引の基本形をつくった。スラッフア、ドップ、ケインブリジ大学出版局の編集者のバービッジ (Peter Burbidge)、王立経済学会でケインズの後任のセクレタリーのオースティン・ロビンソン (Austin Robinson) は、ドップが作成したひな形をもとに専門の索引作成者に委ねることに合意した。しかし、ケインブリジでは適任者が見つからず、スラッフアがドップを説得しようとしたが、ドップはそれを断った。

1955 年 10 月にロウズマリ・ゴム (Rosemary Gomme) に依頼することになった。彼女はケインブリジの経済学の卒業生で、フリーランスで出版局の仕事をしていた。スラッフアは忙しく、ドップは 1954 年春に手を引いていたので、ゴムは 1955 年 11 月から 1957 年 5 月までの 18 か月、編集上の指導をほとんど受けなかった。彼女は 330 時間分の報酬を受け、完成させた索引カードを引き渡した。しかし、スラッフアもバービッジも満足せず、改めてはじめることを二人は合意した (446)。

1957 年 10 月、ルネイ・ヘイグ (Réne Hague) に仕事を委ねることが決定された。ヘイグはバービッジのもとで編集や索引作成の経験があり、1957 年から 1962 年 3 月までの 4 年間作業をしたが、最終的には投げ出してしまっ

9) 以下、本節で Gehrke (2005) からの引用や参照ページの指示は、ページ番号のみを記す。

た。索引の仕事は「何年間にもわたって私の生活を悲惨にしてきました」と彼はバービッジ宛に書いた。ドップは索引の仕事で「底なしの砂地獄」と呼んだ(1962年7月18日付バービッジへの手紙)。

1962年6月5日、スラッフアとバービッジは話し合っ、未完成のヘイグの索引(Hague-Index)をケインブリジ在住でプロの索引作成者のフランク・ブランド(Frank Bland)に渡すことを決めた。それはヘイグが作成したカードを経済学者に渡す前に、修正し完成させるようにするためであった。だが、ブランドは仕事を完成させることができず、1962年10月に索引カードをすべて返却した。ブランドは項目Mまでは容易にチェックしたが、自分の能力を超えていると申し出た(451-452)。

ゲールケは、前記のように、総索引の作成作業からドップは手を引いたと述べていたが、まったく係りを断っていたのではなかったようであった。ブランドが投げ出したあと、ドップはヘイグ索引のタイプ版のチェックをして、1963年7月に、見逃すことが出来ない誤りを見つけたとバービッジに知らせていた。しかし、ドップのチェック作業は蝸牛の歩みであった。スラッフアは、ドップにアシスタントをつけることをバービッジに提案したが、ドップは一人で続けることを選んだ(1964年1月22日、バービッジからスラッフアへの手紙)。(453)

スラッフアはドップの仕事の進行に関してバービッジを介して不満を述べていたが、「バービッジの巧みな外交術はスラッフアを静かにさせ、ドップを忙しくさせるのに成功した」(454)。

1964年10月末までにバービッジはスラッフアに次のように伝えた；ドップはタイプ版全体の事前調査の最終版を送って来た；いくつかの再タイピングとクロスチェックのあと、あなたの検証のために整えます(455)。

バービッジはケインブリジ大学出版局のマンスブリッジ(Mansbridge)のための1964年10月29日付の部内メモにつきのように書き残している。「最後の障害は——最大で最も手ごわいが——最終的なタイプ原稿がスラッフアの容認を得ることだ。スラッフアの自己破壊的な完全主義(Sraffa's self-destroying perfectionism)についてはいかほどかは君も知っているだろう。……最終

的にはスラッフアの頭越しに、王立経済学会に直接アピールせざるを得ないかもしれない。スラッフアが索引の最終段階で不合理に妨げようとするなら、それを表立たせるよう完全に備えるつもりだ。索引に関する私の考えは、それはすばらしくあるというのではなく、ただ完全に実用的であればよいということであり、出版局が恥を感じるものが決してないものであることだ」(455-456)。

1964年12月14日、ドップはバービッジに「リカードの索引のできることはすべてやったと考えている。……校正刷を見ることを別にすれば私に残されたことはピエロの激怒に向き合うことだけだと考えている」と知らせた(456)。

1965年3月3日、バービッジはドップに、索引についてスラッフアと最終的に話をすることができると知らせた。「スラッフアにはタイプ原稿のサンプルを渡します。スラッフアはサンプルを極めて詳細な吟味にかけられるでしょう。もし満足すれば出版許可をくれるでしょう。もし満足しなければ多分索引全部を捨ててしまうでしょう。オースティン・ロビンソンはさしあたり賛成しないでしょうが、もはやピエロとはかかわりなく進めていくつもりです。索引から彼の名前をはずして、そのかわり極めてシンプルに、索引はドップとヘイグのものとしします」(456)。

その後、1965年の春と夏には索引に関する記録はないとゲールケは述べている。

出版局のバービッジは、1965年11月までに索引の活字組版に入ろうとしていたようだが、その前にスラッフアは索引の最終バージョンを自分の目で確かめたいといい、主要項目のいくつかのなかの配列に極めて不満足のようにだと、ドップに知らせていた。(456)

1966年7月8日にバービッジはドップに、スラッフアは索引をつくる別の企てをしている；スラッフアはヘルチェ教授の助けでドップの索引の基本版のさらなる改訂をしようとしている；ヘルチェは8月にケインブリッジに来て、マーシャル・ライブラリーでスラッフアとともに整理作業をする；ということを知らせた。またバービッジは同日、マンズブリッジに、スラッフアは彼の同僚がこの5年間かかっていた索引を受け入れないことを最終的に決意し

た；全く新しい索引がヘールチェによってまとめられることは間違いない旨を伝えた。加えてバービッジは印刷所に対し、索引作成用のカード 1 万枚をマーシャル・ライブラリーのスラッファに届けるよう依頼した。(457)

「総索引に関するスラッファとアルノルド・ヘールチェとの共同作業は、スラッファにとって 1966 年夏のやや精力的な 6 週間の作業であったに違いなかった」(458)。スラッファとヘールチェは 1964 年 7 月にアムステルダムで最初に会って、その後手紙のやり取りがあった(松本註：スラッファの手帳を見ると、社会史国際研究所 IISG で開催された会議に出席するためにスラッファはアムステルダムを訪れたことがわかる。7 月 23 日にヘールチェと会っている)。1966 年 2 月にヘールチェがケインブリッジを訪問したとき総索引に関する協力が合意された。スラッファは手帳の 1966 年 2 月 28 日に「Hague-Dobb Index の A - B の項をヘールチェに渡した」と記入している。スラッファはこの計画を最初は秘密にしていた。(458)

「1966 年 8 月 2 日～16 日、9 月 4 日～29 日の 6 週間、マーシャル・ライブラリーのスラッファの部屋でスラッファとヘールチェは索引のために共同で作業をした。ヘールチェとの共同作業は実際にはスラッファが期待したほどにはスムーズで効果的とはいえなかったが…… 使い物になる索引案の概略をついにまとめあげた」(458)。9 月 30 日、手帳には「Finito schede index (索引カード完成)」と記入された。

10 月の最初の日々、スラッファは一人で作業を続けたが、共同作業の結果に満足できないことに気づき始めた。それから 1 年近くなった 1967 年 8 月 16 日、スラッファはバーバラ・ロウ (Barbara Lowe) に戻って来て助けてくれるよう手紙を書いた。ロウ夫人は『リカード著作集』の編集でスラッファを補助した一人である(第 I 巻の総序で謝辞)。ロウ夫人への文面で、スラッファはそれまでの索引作成の試みについて悪く言い、ヘールチェと作業した時間を「a hell of a time during the summer of last year」と言っている。(459)

1967 年 5 月 20 日、バーバラ・ロウから「私はあなたをこき使って……それを完成させる決意をしています」と返事が来た。1969 年 8 月、バーバラ・ロウは教職の仕事をやめてケインブリッジに戻ってきた。そして、1969 年 9 月

1日、マーシャル・ライブラリーのスラッフアの部屋で、常時並んで作業を始めた¹⁰⁾。(460)

スラッフアは手帳の1971年12月17日の欄に大きな字で「RICARDO INDEX TO PRESS」と記入し、索引作成作業はようやく終了した。1971年はじめにはスラッフアの視力が落ちてきて、ロウ夫人の助力がなければ総索引作成という目標は成就しなかったろうとゲールケはいう(460)。1971年12月31日の手帳にスラッフアは「Prima sera che non posso leggere il giornale con buona luce normale (普通の光のもとで新聞を読むことができなくなった最初の夕べ)」と記している(461)。

スラッフアは自身を含めたすべての人に厳しい要求をした。「すべてのトラブルは最初の小さな誤りが原因となる。誤りは演繹過程で累積するのだ」(D3/12/11:36)。(463)

以上、Gehrke (2005) に依拠してリカードの総索引の作成過程を概観した。

総索引の特徴—シェフォルト論文より

最終的にスラッフア自身によって取りまとめられた『リカード著作集』の総索引はどのような特徴があるのだろうか。「総索引」には凡例やそれらしき記述はない。Schefold (1998) からその一端をうかがい知ることができるだろう。

1973年、シェフォルト (Bertram Schefold) がマーシャル・ライブラリーのスラッフアの部屋を訪れたとき、テーブルの上に『リカード著作集』第IV巻が開かれていて、その欄外にスラッフアが鉛筆書きした「labour theory of value」を読むことができた。それは草稿「絶対価値と交換価値」で、397ページの「I may be asked……to obtain it.」と書かれている部分であった。しかし、第XI巻総索引に「labour theory of value」の見出し語はない。シェフォルトは後にスラッフアに、索引の見出し項目になぜ「labour theory of value」がな

10) バーバラ・ロウはケインズ著作集 (*The Collected Writings of John Maynard Keynes*) の索引 (ケインズの生前出版された著作の場合もほとんどの索引が使用されているが、それを除く個々の巻の索引) の作成にも携わったことが、同書第XXX巻 (Keynes 1989)、p.xv に記されている。そして、ケインズ著作集の編者は総索引の作成もロウ夫人に委ねていたが、半分も終わらないうちに1984年に彼女は亡くなったこと、ロウ夫人がスラッフアの『リカード著作集』の総索引の準備に携わったことなどに言及している。

いのか尋ねると、スラッフアは、リカードのテキストに明確に現われていない概念は避けたいのだ、とそっけなく答えたということであった。

シェフォルトは別の事例に注目している。リカード研究者にはよく知られた「corn-ratio theory of profits」である。これはリカードのテキストにはないフレーズで、編集者のスラッフアが使用した概念である。その「corn-ratio theory of profits」が索引の見出し項目に採用されているのである。これはスラッフア自身の見解が索引に反映されたもので、第 I 巻の編者序文、『利潤についての試論』（1815 年）、書簡など、スラッフアが関係すると考えるページ番号が記載されている¹¹⁾。

もう一点、シェフォルトが注目したのは「theory of comparative advantage」である。比較優位の理論のアイデアの実質をリカードは展開していたが¹²⁾、適切な名称を与えることをしなかった。教科書が比較優位の原理 (the principle of comparative advantage) と呼ぶものをリカードが最初に提案したかどうかは論争がある。リカードのテキストに comparative advantage、relative advantage などがあるが、それらはすべて課税による比較優位の変化に関したものである。スラッフアは注意深くこの名称を避けて「外国貿易 Foreign trade」、「Taxation, and prices 課税、と価格」の見出しで必要なヒントを提供している。

シェフォルトはスラッフアの総索引を次のように評価している。「よりよい地図が、景色を写すのに、写真よりもより優れた概観を提供することができるように、スラッフアの索引は、彼が 1960 年から 1973 年の間、専門家のための索引の編集作業をしなくて教科書を書いたとして、その教科書よりも、リカードの生涯と時代、リカードの仕事と理論の複合性についてよりよく気づかせてくれるかもしれない」（Schefold 1998, p.477）。

総索引出版の遅延

Gehrke (2005) は総索引の作成が終了してから出版に至る過程も追って

11) 総索引には、リカードの著作や同時代人の手紙などの本文テキストには出てこない、「マルクス Marx」、「マーシャル Marshall」などが見出し語にある。

12) 例えば、リカード自身「comparative advantage」を『原理』第 19 章（初版では第 17 章）「貿易路における突然の変化について」の最初の段落で使っている。

る。それによると、総索引＝第 XI 巻は 1973 年 2 月に出来上がったが、製作・販売元のケインブリジ大学出版局の意向で、本巻 10 巻のうち品切れであった巻を増刷し、全巻の在庫が揃ってから配本することになったとのことであった。また、水田洋氏はスラッフアから直接聞いた話として、つぎのようなエピソードを紹介している（水田 1975）。

1973 年 6 月 5-6 日にアダム・スミス（Adam Smith）の生地であるスコットランドのカコーディでスミス生誕 250 年記念の国際シンポジウムが開かれ、それに招かれた水田氏がシンポジウムに先立って滞在していたロンドンからケインブリジのスラッフアに電話をして面談の約束を取り付けた。しかし、約束の日時にスラッフアの部屋を訪れると、スラッフアは在室していたが、水田氏との約束をまったく忘れていた。電話を受けたこと自体覚えていなかった。スラッフアはそのあとの時刻に別の約束を入れていたのだが、少しの時間は話ができようであった。その時、吉澤芳樹氏と守本順一郎氏が同行していて、吉澤氏の、そして日本のリカード研究者共通の質問で、『全集』の総索引はどうなっているのかと水田氏は尋ねた。それに対して「スラッフアはにやっとわらって書架に近づいた。かれのひろい書齋は、窓とドアをのぞいて、四面が書架になっている。かれがそこからひきぬいてわれわれのまえにおいたのは、まぎれもない『リカード全集総索引』で、ちゃんと一九七三年にケンブリジ大学出版部から発行されたかたちになっている。これはどうしたことかと、あつげにとられているわれわれにむかって、かれはいった。『じつはこれは二月にできあがっていたのだが、いざ広告しようというときになって、出版部は、全集そのものが全部そろって在庫があるわけではないことに気がついた。それで、在庫のないもの、すくないものを、増刷して、全部そろえてから、索引をうりだすことにしたわけだ。販売政策上の考慮だね。』（水田 1975、174-175 頁）。

ゲールケは大学出版局に問い合わせ、水田氏はスラッフア自身から、総索引の発刊の遅延の理由を聞いているが、はたしてそのまま鵜呑みにしてよいだろうか。ここで筆者（松本）が見つけた一つのエピソードを紹介することしよう。

筆者は 1991 年に、英国ケインブリジのトリニティ・コレッジ図書館でスラッ

ファの旧蔵書である Sraffa Collection (当時はこう呼ばれていたが、現在では Sraffa Library と呼ばれている) にあるいくつかの文献を調査した時、『リカード著作集』全 11 巻も閲覧した。それには書き込みがされている (annotated) とカタログ (オンラインカタログ) に記載されていたからである。スラッフアは全 11 巻を 2 セット所蔵していたが、1 セットには書き込みはなく、他方には訂正等の書き込みがされていた¹³⁾。そのうち第 XI 巻への書き込みで、1973 年の 2 月に出来上がっていた (印刷・製本が終わっていた) が出版 (販売) されたのが同年 11 月であったことを知った。また同時にこの第 XI 巻の xxxi-xxxii ページに掲載されている正誤表に誤植があったことがわかった。しかし、スラッフア所蔵のもう一方の第 XI 巻では誤植は訂正されていて、大学図書館などの所蔵本も誤植箇所は訂正されていた。スラッフアの手もとにあった、2 つの第 XI 巻は、どちらも製本され、ジャケットがかけられていて、見かけ上なんのの違いもない。ただ一つの行に違いがあるだけである (全ページを照合したわけではないが)。ケインブリジ大学図書館やマーシャル・ライブラリーの所蔵の第 XI 巻でも誤植はなかった。一見しただけではわからないが、誤植のない各冊を仔細にみると、当該ページの一葉が差し替えられていることがわかった。帰国後筆者自身の所蔵本や関西学院大学図書館所蔵本も同様に差し替えがあった。したがって、2 月に出来上がった本の販売が 11 月になったのは、製本済みの本のすべてでの差し替え作業のためであったと筆者は判断した。また、スラッフアは校正過程で誤植を見逃していたと筆者は考えた (松本 1998 ではそのように記した)。だが、それらは必ずしも正確ではなかった。

2009 年、筆者はトリニティ・コレッジ図書館でスラッフア・ペーパーズを調査する機会を得た。そのさい、この誤植、差し替えについて再度調査した。

スラッフアの手帳を見ると、1972 年 11 月 7 日 (火) に赤い字で「Finito revisione / bozze Indice Ricardo」と記入され、1973 年 1 月 31 日 (水) に

13) スラッフアが所蔵していた *Works of Ricardo*, 11 vols. は 2 セットあり、トリニティ・コレッジ図書館での請求番号は Sraffa 2678 と Sraffa7824 であるが、Sraffa2678 のセットの方にスラッフアによる書き込みがある。

「Ricardo XI Index / received bound volume」、1973年11月22日に「Publication Day / of Ricardo / Vol.XI / (Index)」と記入されている（/は改行）。書き込みがある第XI巻のタイトルページ（p. iii）の下部に「ready Feb. published Nov.」とスラッフアの手で記入されている。つまり、1972年11月7日に索引の校正が終わり、1973年1月31日に製本された第XI巻をスラッフアは受け取ったが、その刊行日は同年の11月22日だということである。

2月に出来上がったものが（1月31日にスラッフアが受け取ったのはいわゆる見本刷であったのだろう）、その出版がなぜ11月になったのか。総索引が出来上がった時点で他の10巻の在庫が揃っていないくて、たとえ全11巻揃いで販売することができるよう必要な増刷をするためだったとしても、第XI巻を2月に出版流通できない理由があったのだ。

1973年1月末ないし2月に出来上がった第XI巻には誤植があった。誤植の箇所は、xxxii ページの最後の行にあった。第XI巻の xxxi-xxxii ページには正誤表（第X巻の末尾に付された正誤表の追加）が印刷されていたが、その正誤表に誤植があったのだ。Sraffa2678の第XI巻では、xxxii ページの最終行が「no.5 read 5, for found sound」となっている。Sraffa7824や販売された第XI巻では「no.55, for found read sound」である。その誤植をスラッフアは校正で見落としていたのか。そうではなかった。第XI巻の校正刷りを調査すると、誤植があった行は、当初の組版では、つぎのページの1行目にあった。

Works of Ricardo の校正刷は関連資料とともにスラッフア・ペーパーズに残されているが、そこに残されている第XI巻の校正刷で一番最後のものと思われる D3/11/240 では、誤植があった注番号55に関する訂正記述は xxxii ページの1行目にあり、注番号54に関する訂正記述は xxxi ページの最終行にあった。だが、校正刷には誤植はない。D3/11/240に残されている校正刷には行を移す指示はないが、出来上がった本では注番号55に関する訂正記述は xxxi ページの最終行にある。第V巻の同じページ中で訂正が2つあり、正誤表中のそれら2つがページを跨ぐことを避けるために行を前に送ったと考えられる。しかもそれは、印刷にはいる最終段階で行われたと思われる。当該行を、同一ページ内で単に全体をずらすのではなく、前のページに移すということで、そ

の際になぜか活字が入れ替わったとしか考えられない。

このことにスラッフアが気づいたのは、すべての印刷が終わり、製本も終わってからであったのだろう。スラッフアの手もとにあったもう一冊の第 XI 巻には誤植がないし、松本が調べた、ケインブリジ大学図書館、マーシャル・ライブラリー、関西学院大学図書館および松本の所蔵本のいずれにも誤植はなかった。何故か。第 XI 巻に追加された正誤表は xxxi-xxxii ページと一葉の両面に印刷されているが、その一葉が差し替えられたのである。誤植を含む一葉が切り取られ、正しく印刷された一葉が貼付されているのである。この差し替え作業は非常に丁寧な仕事で、知らずにページをめくっていても気づくことはないだろう。一見しただけではわからない。誤植がないスラッフア所蔵の第 XI 巻を含め、松本が直接見た第 XI 巻ではすべて差し替えがされていた。

Sraffa 2678 の第 XI 巻の xxxi ページの右下に、次のような鉛筆書きがある。「last line / a collection slip / will be stuck on / 7 Aug. written to Crutchley / asking a corrected copy」(／は改行)。Crutchley はケインブリジ大学出版局長である University Printer のブルク・クラッチリー (Brooke Crutchley) であるが、8 月 7 日に、スラッフアは訂正を貼付した 1 冊を請求したということである。

IV むすびにかえて

スラッフアのリカード著作集編集の綿密さは、改めていうまでもないことで、本稿は屋上屋を架しただけなのかもしれない。スラッフアは 1930 年 3 月に編集作業に取り掛かったのだが、最初は 1 年以内に、遅くとも 2~3 年で終わると思っていたことは、スラッフア自身が手紙その他で書いていて、そのとおりであったのだろう。戦争や新資料の発見といった外的な事情を別にしても、出版まで 20 年余という長い期間がかかったのは何故であったのだろう¹⁴⁾。

14) オースティン・ロビンソンによると、ケインズは 1938 年 10 月までに王立経済学会理事会で、8 巻ないし 9 巻でまもなく出版されると報告し、1939 年 10 月には 8 巻で出版準備ができていと報告し、1940 年 3 月には著作集に必要な十分な用紙はすでに購入していると報告していた。Robinson(1990, p.172) 参照。

リカード研究の権威による資料考証を覆すなど、綿密な校閲作業で時間を要したことに一つの理由があろう。スラッフアが1931年9月で、ケインブリジ大学講師の職を辞したのは、ほかでもなく、リカードの編集に専念するためであったと筆者は考えている。そのため、1927年夏から始まったスラッフア自身の研究も一時中断した。

スラッフアは1926年3月にイタリアのカリアリ大学の正教授に就任した。1927年1月にケインズからケインブリジ大学の経済学講師職の可能性を示唆され、結局はそれを受け入れ、1927年10月1日付での就任が決まった。大学での講義、自身の研究、リカードの編集というアカデミックな仕事を表の活動と言うならば、スラッフアには裏の活動があった。それはアントニオ・グラムシへの支援活動であった。スラッフアより7歳年上であるが、親友であったアントニオ・グラムシは1926年11月にファシスト政権によって逮捕され、獄中にあった。グラムシは1934年10月に仮出獄を認められたあとも、1937年4月25日に完全な自由を回復するが、1937年4月27日に死去するまで病院に入っていた。スラッフアはケインブリジにいても獄中のグラムシに物心両面で支援を続け、大学の休暇期間（春、夏、冬）はイタリアに帰省し、可能な場合にはグラムシと面会し、またパリにあったイタリア共産党の指導部とグラムシとの仲介役も果たした。このようなことも、編集作業遅延の一因ではなかっただろうか。

綿密な校閲作業という、スラッフアの完全主義はよく知られている。スラッフアの編集作業の遅延を心配したオースティン・ロビンソンは1948年にモリス・ドップに協力を依頼し、ドップはそれを引き受けた。ドップがちょうどトリニティ・コレッジのフェローに任命されたときであった。ドップの協力に関してはPollitt (1988) が詳しく考察しているが、ポリット (Brian H. Pollitt) は、1947年夏から1948年1月までスラッフアの編集助手を務めたルーシー・マンビー (Lucy Munby) にインタビューし、スラッフアの完全主義の一端を紹介している。スラッフアは定型的な仕事でも再チェックしたということであった¹⁵⁾。

15) ドップの協力、スラッフアの完全主義の詳細はPollitt (1988) 参照。

なお、リカード著作集編集出版の業績に対して、スウェーデン王立科学アカデミーは、1961 年、スラッフアに Söderström Gold Medal を授与した。式典ではスウェーデン国王からスラッフアにメダルが授与された。この賞はアルフレッド・ノーベル記念経済学スウェーデン国立銀行賞の前身である¹⁶⁾。

付録

リカード著作集全 11 巻の各巻には、何らかの序文、まえがき、あるいは解題が付されている（書簡集の 4 つの巻は最初の第 VI 巻にのみ）。それらは、各巻によって、その性格によるのか、表現が異なる。各巻の表記を、邦訳（邦訳書『リカード全集』のそれ）と併せて見ることにする。

- 第 I 巻 General Preface 総序
Introduction 編者序文
Preface (リカードがかれの『原理』に付したそれ) 序言
- 第 II 巻 Introduction 編者序文
Introduction (マルサスがかれの『原理』に付したそれ) 序文
- 第 III 巻 Prefatory Note to Volumes III and IV 第三巻および第四巻への
編者序文
Note on the Bullion Essays 地金論争関係諸論文にかんする解題
- 第 IV 巻 Note on 'Essay on Profits' 「利潤についての試論」にかんする
解題
第 IV 巻の目次に「Note on 'Essay on Profits'」の記載はない。
- 第 V 巻 Prefatory Note はしがき
Introduction to the Speeches in Parliament 議会演説の解題
Note on the Evidence on the Usury Laws 利子制限法にかんする
証言の解題
Note on the Evidence on the Resumption of Cash Payments
現金支払再開にかんする証言の解題

16) 賞の由来を含めて詳細は Arthmar and McLure (2016) 参照。

Note on two Papers on Parliamentary Reform 議会改革にか
んする二つの論説の解題

第VI巻 Preface to Volumes VI-IX 第六-九巻への序

Introductory Notes to the Correspondence 書簡集への編者序文

第X巻 Preface 序言

Note on the Authorship of the Memoir 「思い出」の執筆者に
かんする注釈

第 XI 巻 PREFATORY NOTE 序言

第 XI 巻の目次に「PREFATORY NOTE」の記載はない。また目次に記
載の「INDEX」にはその第 1 ページ目のページ番号の記載がない。Index
(索引) が付されている他の巻では、目次にその第 1 ページ目のページ番号
が記載されている。

参考文献

- 松本有一 (1998) 「第 9 章 スラッフア」、橋本昭一・上宮正一郎 [編] 『近代経済
学の群像』有斐閣、所収。
- 松本有一 (2010) 『『商品による商品の生産』へのスラッフアの歩み』『経済学論究』
第 64 巻第 1 号。
- 水田洋 (1975) 『社会思想の旅』新評論。
- Arthmar, Rogério and Michael McLure (2016) “Sraffa, Myrdal and the 1961
Söderström Gold Medal”, *The University of Western Australia Economics
Discussion Papers* 16 (18, April 2016) .
- Gehrke, Christian (2005) “Bringing the Edition of Ricardo’s Works to Com-
pletion: The Making of the General Index, 1951-73”, *Review of Political
Economy*, Vol.17, No.3, pp.443-464, July.
- Keynes, John Maynard (1989) *The Collected Writings of John Maynard
Keynes*, Vol.XXX, edited by Donald Moggridge assisted by Judith Allen,
Barbara Lowe and Beth Scott, Macmillan and Cambridge University Press.
- Milgate, Murray (2017) “Ricardo and his Editors”, *Contributions to Political
Economy*, Vol.36. pp.1-23.

- Pollitt, Brian H. (1988) “The collaboration of Maurice Dobb in Sraffa’s edition of Ricardo”, *Cambridge Journal of Economics*, Vo.12, No.1, pp.55-65, March.
- Ricardo, David (1951-55, 73) *The Works and Correspondence of David Ricardo*, 11 vols. edited by Piero Sraffa with the collaboration of M. H. Dobb, Cambridge University Press (『リカード全集』第 I 卷～第 X 卷、雄松堂書店、1969 年-1978 年、第 XI 卷、雄松堂出版、1999 年).
- Robinson, Austin (1990) “Fifty-five Years on the Royal Economic Society”, in John D. Hey and Donald Winch (eds.) *A Century of Economics, 100 Years of the Royal Economic Society and the Economic Journal*, Basil Blackwell.
- Schefold, Bertram (1998) “Reading Sraffa’s Indices - a note”, *The European Journal of the History of Economic Thought*. Vol.5, No.3, pp. 468-479, Autumn.